



通信 Mar.

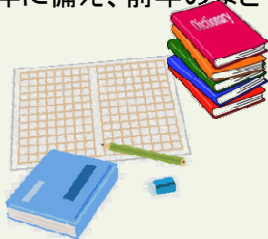


春一番が吹きました。大倉山公園の梅は散り始め、庭のポケやレンギョウのつぼみが少しずつ咲き始めています。いよいよ春が近づいているんですね。
個個港学舎 舎長 八木貴子

学習状況のお知らせ

卒業、進級おめでとうございます。春休みは宿題がない人も多いですが、安心してはいられません。休みが短いので、次の学年に備え、前年のまとめをしておきましょう。

塾では年度替わりで事務機器や家具の入れ替え、レイアウト変更をして、新年度にそなえ設備を整えています。

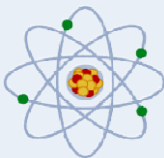


いろはに偉人裏話「ゆ」

◆「ゆ」湯川秀樹◆中学校時代の湯川は目立たない存在で、何もしゃべらないので、付いたニックネームは「イワンちゃん(言わん)」でした。しかし彼の担当の先生の評価は「内、剛にして、自我強し」というもので、負けん気は人一倍つよい少年でした。彼は世間との交渉ができるだけ少ない世界で生きる道を考え「学者になって学問の分野で生きるしかない」と思うようになりました。



◆素粒子の相互作用について◆専門的な話になりますが、この世に存在する全ては原子から成り立ち、その真ん中の原子核にあるプラスの陽子(ようし)同士が何故結びつくのかが、長年の課題でした。1935年彼は中性子の中にマイナスの電気を持つ中間子があって原子核を構成しているという発表をしたのです。しかし当時この発表はあまりにも大胆過ぎたことと、日本は中国と戦争中だったために、世界から注目を浴びることはありませんでした。

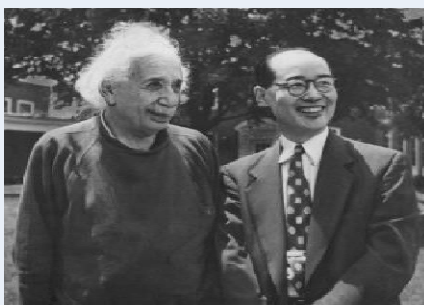


◆ノーベル賞◆1937年アメリカの学者が中間子を発見したことで、湯川の発表は認められ1949年にノーベル賞受賞となりました。当時の日本は終戦から4年目、復興の兆しすら見えない状況でした。新聞各紙は号外を出し湯川の受賞を報じました。

「科学万歳！ その国際性万歳！ そして文化と平和の民族万歳！」湯川の受賞は敗戦国として、ともすれば卑屈な気持ちになり、脱力感に打ちのめされていた日本人を狂喜させました。その精神を鼓舞し、日本再生のきっかけとなったと言っても間違いではありません。



◆アインシュタインとの出会い◆1939年、アインシュタインから訪問の連絡がありました。湯川がドアを開けると表情のこわばった彼が立っていました。アインシュタインは部屋に入るや否や湯川の手を握りしめ、大粒の涙をこぼし、「何の罪もない日本人を、原爆で傷つけてしまった。許してほしい。」肩を震わせながら、何度も言葉を繰り返しました。湯川は大変な衝撃を受けました。



「人間」アインシュタインの良心に触れた彼は、「学者は研究室の中が世界の全てになりがちですが世界の平和なくして学問はない」という考えにいたり、以後、積極的に平和運動に取り組んでいきました。

旬！フキノトウのレシピ

フキはキク科フキ属の多年草で日本原産の山菜、全国の山野に自生しています。フキノトウはつぼみの部分にあたり、この花が咲いた後には地下茎から伸びる葉(フキ)が出てきます。



季節を感じさせる山菜として、日本料理には欠かせない食材です。

「イカのフキみそ和え」

フキノトウは春先にスーパーでも手に入ります。手軽なフキみそを作れば、ほろ苦い味と、独特な香りで、ご飯が進みます。いろいろなあえ物に使えますが、今回は刺身用のイカを和えました。お酒のおつまみに最高ですが、ご飯のおかずとしても良いと思います。

フキノトウ:100g(10個程度)、味噌:大4、みりん:大2、砂糖:小3~4、サラダ油(風味の強くないゴマ油):大2
◆フキみその作り方①味噌とみりんを混ぜる。②フライパンで油を温める。③フキノトウを5mm角程度に刻み、フライパンに入れる。(フキノトウはアクが強いので切ったらすぐに炒めます)④1分ほど炒め、油が回ったら、①を入れ、2分程度練るように混ぜ、水分を飛ばす。⑤砂糖を入れて味を調整する。



⑥冷ましたら、冷蔵庫で保存する。

◆イカのフキみそ和え/
刺身用イカ:人数分、フキみそ:大1~1.5(1人分)

